小豆支部　研究のあゆみ

１　研究主題

付けたい力を明確にし，その力につながる児童の「関心」を高めたり「自信」をもたせたりする授業づくり

２　研究活動の概要

⑴　４月２３日（木）土庄小学校　研究組織作り　研究計画の立案

⑵　１１月１９日（木）土庄小学校

①「話す・聞く」「読む」の領域でのテーマに沿った実践交流

②　指導・講話

指導者　香川県教育センター　尼子智悠　指導主事

「実践についての指導及び学習指導要領における評価に関する講話」

３　研究内容

⑴　実践交流について

研究テーマに基いた「話す・聞く」「読む」領域での各自の実践を紙面にまとめ，発表・交流を行った。

小豆支部では，昨年度までの研究内容を踏まえ，「付けたい力」を自覚し，力の獲得に向け進んで学ぶ子の育成，「自信」を深めたり，新たな課題意識をもったりしながら「関心」を持続させて進む子どもの育成を目指し研究に取り組んでいる。「付けたい力」と「自信」，「関心」の関係を大切に，目指すゴールに向かっていけるような単元構成や授業展開を工夫した実践が持ち寄られた。

①　既習を生かした課題設定

既習を振り返り，「できる」「できない」を明確にして言語活動に取り組むことで，子どもに学習の見通しをもたせることができる。「付けたい力」を意識した課題設定がされるため，子どもは関心をもって学習活動に取り組むことができる。また，「付けたい力」を活用して課題が解決できたという成功体験は「自信」となり，さらなる課題解決につながる。

→「サラダでげんき」「らちとらいおん」（１年）　「サーカスのライオン」（３年）
「一つの花」（４年）　「海のいのち」（６年）

②　児童の実態に合わせた教具の工夫

特に特別支援学級での取組では，実態に応じた教具の工夫が，子どもの関心の持続や自信をもつことに効果的であった。視覚的に分かりやすく色分けした付箋紙やメモ，話型の提示，ボイスレコーダーやタブレット等のＩＣＴ機器を活用することで、意欲的にゴールを目指すことができた。

→「すきなあそびはなあに」「さとうとしお」（１年）「話し方名人になろう」（３年）
「聞いてほしいな，心に残っている出来事」（４年）

③　振り返りの視点

学んだ学習の仕方や身に付けた力は何かを整理し，次の学習に生かす。

(2)　指導・講話について

「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」の内容を示しながら，指導と評価の一体化，評価基準の作成の仕方等について大変分かりやすく説明していただいた。また，一人一人の実践についても丁寧なご指導をいただいた。

①　評価について

評価とは，子どもが自分の学びを振り返り次の学びに向かうことができるようにするためのもの，また教師が子どもの学習状況を的確に捉え，指導改善を図るためのものである。

②　評価基準の作成

指導することが評価になるため，指導しないことは評価しない。各時間の具体的な学習活動を構想し，単元のどの段階でどの評価基準に基づいて評価するのかを計画的に位置付けておく必要がある。単元のゴールでの具体的な子どもの姿を教師がしっかりとイメージしておくことで，支援を要する子どもへの手立てが想定できる。

③　評価の場の設定

ポートフォリオや授業中の発言等，子どもが表出できる場（評価できる場）を用意する。教師自身が評価基準を明確にもつことで，教職員間，保護者，子どもと評価を共有できる。

(3)　成果と課題

・　領域は限定したが，単元は決めずに実践交流したことで，学年や学級種の違う授業実践が幅広く提示された。今後の実践に生かされやすい反面，学年には偏りが見られたことは課題である。

・　個々の実践を指導者の先生に価値付けていただいたことで，実践交流で得たことの理解がより深まった。今回は全体での実践発表であったが，グループ討議（学年別　領域別等）の形にすることで，より活発な意見交流ができるかもしれない。

・　今年度は１回のみの研修となり，授業研究ができなかったので来年度はぜひ今年度の研修を生かした授業研究ができればと思う。

４　県の研究との関連

【今年度の研究での成果】付けたい力の明確化

付けたい力や身に付けた力を明確にすることで，児童自身が身に付けた力を他の単元でも生かして活動しようとする姿が見られる。

子どもが解決したいと思う学習課題を作ったり，児童とともに単元構成を考えたりすることで，子ども自身が学習の見通しをもつことができ，付けたい力を意識して学習することにつながった。

【今年度の研究での課題】関心を持続させる単元づくり

子どもが主体的に学んでいくために，単元の始めにもった関心を継続し，自信を深めさせる支援の方法を考えていくことが今後の課題である。そのためにも，身に付けた力を使って課題が解決できたという成功体験を繰り返し積んでいけるような単元構成や言語活動の工夫が必要である。

さぬき・東かがわ市部　研究のあゆみ

１　研究主題

児童が主体的に学ぶ国語科学習の在り方
―付けたい力に対する児童の「関心」を高めたり「自信」をもたせたりする支援の工夫―

２　研究活動の概要

・　１１月２０日（金）　研究主題、研究組織について
　　１・２学期の取り組みについての情報交換
　　３学期の学習教材研究

３　研究内容

（１）コロナ禍における対話活動

今回、「話す・聞く」の単元の活動が行いづらい中、どのように話し合い活動を行っていったのか情報交換した。

・　空間の配慮
　机の配置や、空き教室を利用して２つに分けて行うなど、距離を確保できるようにする。
・　時間の配慮
　短時間で意見が述べられるよう、事前に話す内容を精査させておく。
・　メディア機器等を利用して
　書画カメラを利用して個の意見を全体に発信したり、付箋を利用して意見交流させたりする。

コロナ禍だから、話し合い活動を行わないのではなく、様々な工夫を凝らし、お互いの意見を交流し合う場を設定していることがうかがえ、今後活動を行う際の参考にもなった。

（２）評価方法について

今年度から教科書が光村図書にかわり、これまで利用してきた「国語の学習」や県版テストが使用できなくなった。どの場面でどのように評価をとってきたのか、情報交換をした。どの学校でも、現在購入している市販のテストでは評価がとりづらく、ワークシートやノートでの評価を増やしているという意見や、「国語の学習」に費やしていた時間を、児童が自由にまとめられる時間に充てることによって、児童の表現を授業時間内にじっくり評価できるようになったという意見が出た。

また、土岐教頭先生より、「主体的に取り組む態度」の評価については、児童が粘り強く取り組んでいる姿が見える評価方法を工夫すること、学習の振り返りの場面で、自己評価や他己評価を加味しながら、見通しをもって学習を調整している姿を見取ること、また、評価を積み重ねて単元全体で総括することをご指導いただいた。

（３）３学期の学習教材研究

「国語の学習」がなくなったことで、授業の進め方や評価の方法に苦慮しているという声を聞いた。

そこで、３学期の学習に生かせるよう、各学年から１単元選び、光村図書のワークシート集の解答モデルをつくったり、改良点を考えたりした。

４　県の研究との関連

【今年度の研究での成果】児童が自ら学ぶ姿の見取り
・　評価について、それぞれの学校で取り組んできたことを情報交換し合えたことで、各校に持ち帰って生かすことができた。

【今年度の研究での課題】
・　研究授業が行えなかったことで、具体的な支援や手立てなどの協議ができなかった。教科書も変わり、各自が指導方法を模索してきたが、共有する場が少なかった。来年度は、具体的な評価方法の在り方を考えていきたい。

高松市部　研究のあゆみ

１　研究主題　　児童が言葉を通してつながり合う国語科授業の創造

～「課題を解決したい」という関心、「話せた・聞けた・書けた・読めた」という自信がもてる授業づくり～

２　研究活動の概要

（１）４月　　研究組織作り、研究主題の設定、年間計画作成

　　６月　　指導案（４本）をもとに個人研修

（２）９月２４日　　第１回研修会　１０月２７日の授業の指導案検討・打ち合わせ

北ブロック・木太小学校

南ブロック・木太南小学校

（３）１０月２７日　第２回研修会（香小研国語部会研究発表会）　研究授業・討議

北ブロック

・木太小学校
- １年　くらべて　よもう(「子どもをまもるどうぶつたち」)
- ２年　読んだかんそうをつたえ合おう（「お手紙」）
- ３年　想ぞうしたことをつたえ合おう（「モチモチの木」）
- ４年　物語の題名の意味を考えよう（「一つの花」）
- ５年　テクノロジーの進歩について考えよう（「『弱いロボット』だからできること」）
- ６年　物語を読んで、考えたことを伝え合おう（「海のいのち」）
- 特支【生単】ことばをたのしもう「秋」（「あったかおにぎり」）

南ブロック

・木太南小学校
- １年　くらべて　よもう(「子どもをまもるどうぶつたち」)
- ２年　読んだかんそうをつたえ合おう（「お手紙」）
- ３年　想ぞうしたことをつたえ合おう（「モチモチの木」）
- ４年　日本語の数え方について考えよう（「数え方を生み出そう」）
- ５年　テクノロジーの進歩について考えよう（「『弱いロボット』だからできること」）
- ６年　物語を読んで、考えたことを伝え合おう（「海のいのち」）

３　研究内容

（１）「課題を解決したい」という関心を高める単元構想や学習問題の工夫

　児童の実態把握や単元で付けたい力を見極め、児童が関心をもち続け、主体的に学ぶ単元構想や学習問題の設定を考える。

北ブロック

- １年「子どもをまもるどうぶつたち」では、今までの積み重ねにより、博士らしい言葉を知ったり、ペアで話したり、イメージから動作化したりと学習の進め方に見通しがもてていた。
- ２年「お手紙」では、学習課題を自分たちで作り、自分たちで解決しようと取り組んでいた。
- ３年「モチモチの木」では、初発の感想とみんなで考えたいことをもとに、場面ごとに課題づくりができた。課題解決のために、並行読書、学びの足跡や教材全文の掲示などの環境整備もしていた。

・　４年「一つの花」では、一人読みの手引き、対話の手引きをもとに、クラスの実態に合わせて作り替えを活用したことで、子どもたちがスムーズに作業に取りかかれていた。
・　５年「『弱いロボット』だからできること」では、話せる場をつくる、人の意見に反応する、疑問を持って考えながら聞くなど言葉をつなぐことを意識した学級経営を普段から行っていた。
・　６年「海のいのち」では、子どもたちの考えを深めるために、どんな発問がよかったのか、どんな揺さぶりが効果的だと考えるかについて話し合われた。
・　特支「あったかおにぎり」では学習の見通し、モデル、ゴールを示す大切さについてご指導いただいた。

南ブロック

・　１年「子どもをまもるどうぶつたち」では、三人指名で友だちの考えを聞く・自分の考えと比べる力が身についていた。
・　２年「お手紙」では、シリーズ読書への誘いのための並行読書、単元のゴール（読書カード）のイメージづくりのための教師の見本カード、カードの書き方を学ぶために「お手紙」を読むという必要感といった単元構成が素晴らしいとのご指導があった。
・　３年「モチモチの木」では、一人一台タブレットを使用しての授業で、子どもたちが「やってみたい。」という意欲を高めた提案性のある授業であった。
・　４年「一つの花」では、グルーピングの仕方やグループ活動への適切な支援について話し合いがなされた。
・　５年「『弱いロボット』だからできること」では、叙述をもとに意見が言える、自分の言葉で言い換える、分からないことを質問できるという学級経営のよさが感じられ、日々の実践が大切だとご指導をいただいた。
・　６年「海のいのち」では、自分の感じたことをマインドメーターで数値化することで自分の意見がはっきりし、友だちと比較し、なぜ違うのかと主体的に関わろうとすることができていた。

（２）「話せた・聞けた・書けた・読めた」という自信がもてる指導過程の工夫

　できた、分かったという成功経験を積む機会を設けることで、付けたい力が身につき、課題解決に対する自信がもてる学習の進め方を考える。

北ブロック

・　１年「子どもをまもるどうぶつたち」では、表を活用したことで順番がつかみやすかった。
・　２年「お手紙」では、友だちの発表に「お～。」「なるほど。」などの共感の言葉が多く出て、自分の意見が伝わったという達成感がもてていた。
・　３年「モチモチの木」では、交流のルールがしっかりできており、褒め合う姿が多く見られた。
・　４年「一つの花」では、ジグソー学習を取り入れ、説明する・聞く・聞いたことを伝えるなど様々な力が身についていた。そのことが自信となり主体的に取り組んでいた。
・　５年「『弱いロボット』だからできること」では、話す・聞くことが中心の活動であった。口頭で言えない子には、書く活動での表出も必要な場合があるという話し合いがなされた。
・　６年「海のいのち」では、教材研究をすればするほど、教師の読みが目的となりがちであるが、子どもたちに付けたい読むスキルを意識する必要があるとのご指導があった。

・　特支「あったかおにぎり」では、言葉を増やすためには、聴くことを大切にし、まねしてみよう、使ってみようと広げていくことの大切さについて共通理解がなされた。

南ブロック

・　１年「子どもをまもるどうぶつたち」では、積み重ねにより、説明文を読み取る技を獲得し、自分の学びを深めるものとしている。
・　２年「お手紙」では、現教部で系統性を調整した「ことばカード」「話形カード」により、子どもたちが「使って話してみたい。」「使って話せた。」と意欲的に取り組んでいた。学校全体での取り組みとして素晴らしいとの意見が上がった。
・　３年「モチモチの木」では、振り返りの積み重ねにより、友だちと話し合ったことで自分が分かったことや気づいたことなど自分の学びをみんながしっかりと書けていた。
・　４年「一つの花」では、カードが書けない子どもには、題名とつながるところ、生み出すってどういうことなど一つ一つスモールステップで確認することで、気づくことがあるという支援について話し合われた。
・　５年「『弱いロボット』だからできること」では、複雑な文章だったが、関係図を使ったり、役割演技をしたりと手立てがあったことで子どもたちに分かりやすかったとご指導をいただいた。
・　６年「海のいのち」では、伝えるスキルの高まりが感じられ、ノートも丁寧に書き、学ぼうとする態度が身についている。対話は双方向であるので、質問する・確認する・問いただすことで伝え合いになっていくとのご指導をいただいた。

４　県の研究との関連

【今年度の研究での成果】

〇付けたい力を明確にし、その力につながる「関心」を高め、「自信」をもたせる。

・　どの授業においても、話し合う活動が設定されていた。日々の授業や学級経営の積み重ねとともに、話し合いの進め方を示す話型など環境も整備し、子どもたちが主体的に取り組める手立てがしっかりと行われていた。また、国語科として、叙述に戻りながら、ことばを介して作品とつながる、友だちとつながる、自分とつながるように授業を組まれていた。経験や友だちの考えとつないで発言したり、相手の話をしっかりと聞き、児童一人一人の考えが、話し合うことによって友達に認められたりしたことで、児童が意欲的に取り組むことができていた。

【今年度の研究での課題】

〇学び合いの振り返り・評価

・　授業の終末に、自分たちの学びについて振り返ることで、自己変容を自己評価できたり、全体の学びを自分たちで評価できたりする。振り返りにより、毎時間の学習のつながりを児童自身が意識できると考えられるので、学び合いの評価についても今後深めていきたい。

〇構造的な板書

・　登場人物同士・場面同士・段落同士・言葉と言葉などを比較したり、全体をつかむために俯瞰で文章を読んだりしたことを板書に残すことで子どもたちの思考の助けとなるようにする。視覚的に整理することで、多面的・多角的に読み、自分との関わりにおいて捉え直し深い考えへと誘うことができるので、構造的な板書についても今後も深めていく必要がある。

坂出・綾歌市部　研究のあゆみ

１　研究主題　　子どもが自ら学ぶ国語科学習の展開
―付けたい力を明確にし，その力につながる子どもの「関心」を高めたり「自信」をもたせたりする授業づくり―

２　研究活動の概要

10 月 21 日（水）　綾川町立綾上小学校　西岡由都教頭による講話

３　研究内容

「国語科で，今，大切にしたいこと～４つの物語を通して～」と題し，国語科部員に講話をしていただいた。４つの物語のそれぞれの良さ，またそこからどんな力を育んでいくのかなど実践事例をもとに紹介してくださった。

紹介してくださった物語は①「白いぼうし」②「かさこじぞう/アンパンマン」③「サーカスのライオン」④「きつねのおきゃくさま」である。

①では，ＢＧＭを流して朗読をしてくださった。すうっと物語に引き込まれ，情景が目に浮かんだ。このような活動を通して，児童一人一人の中にあるものによって物語の読みが変わってくるということを学んだ。②では，物語の内容は全く同じでも，テーマが違うと感じ方も全く違うことを体感した。会場を縦半分に分け，事前に知らされていたテーマは「かさこじぞう」と「アンパンマン」である。読み聞かせ後の全体交流をしていく中でテーマが違っていたことを知り，感じ方のちがいやちがいの面白さ，良さを学んだ。①，②から，自由に考え，想像することを許容し，考える力，想像する力を育んでいくことが大切だと感じた。

③では，音読の指導法を教えていただいた。言葉はそれぞれ意味をもっている。その場面の状況を考えて音読することが大切であると感じた。④では，文章の中に含まれている情報と情報がどのように結びついているかについて考えた。③，④から，国語科では叙述とつなぐ力，場面をつなぐ力をつけていくことが，考える力を育んでいくことだと学んだ。

また，今年度全面実施の学習指導要領の観点についても詳しく教えていただいた。今回の学習指導要領から国語科も５観点から３観点となった。物語を“読む”という活動は，「思考力，判断力，表現力等」をねらうものと位置づけることもできるし，「知識及び技能等」を身に付けるものと位置づけることもできる。ねらいによって評価の仕方も変わってくる。授業の中で，どちらの観点をねらうのかを意識して指導するかを見極めておくことが大切だと学んだ。

実り多き講話になり，どの会員からも明日からの意欲を感じることができた。

４　県の研究との関連

【今年度の研究の成果】関心を高める

・単元の導入段階で既習事項を振り返りながら児童自身が「できること」と「できないこと」を明確にすることや，今使える力を使って本単元で行う言語活動をしてみる時間を設定し，自分たちの課題を明確にすることが関心を高める手立てとして有効だ。また，児童に付けたい力を見極めるためには，教師自身が国語科への関心を高め多面的に教材研究を行う必要がある。

仲多度郡・善通寺市部　研究のあゆみ

１　研究主題　　児童が自ら学ぶ国語科学習の展開

２　研究活動の概要

１１月１１日　　研究授業　多度津町立豊原小学校

２年「どうぶつのひみつをさぐろう」（教材文「ビーバーの大工事」）

３　研究内容

今回の研究授業では、学習指導要領における【思考力・判断力・表現力】の「Ｃ読むこと」（１）ウ「文章の中の重要な語や文を考えて選び出すこと。」を重点指導事項とし、「自分が知るべきことについて詳しく知る」ということを意識しながら、重要だと思う語や文を見付ける活動を通して、説明文の内容を正しく読み取る力を育成することを目標とした授業が提案された。

これまでに児童は教材文「いろいろなふね」や「１年生にうさぎ当番のバトンタッチをしよう」の学習の際に本で調べた経験をしているが、教師がある程度探すページを限定していた。そこで、本単元では、自分で本を選び、関係のある言葉に着目して文章から探す活動が行われた。単元の初めに教師のモデル文を紹介することで、児童自身が気になった動物の秘密を調べて紹介しようとする意欲が高まり、主体的に取り組むことができる。

本時では、ビーバーの巣の秘密を見付けることを通して、どのように本で調べたらよいのかについて考えた。児童は、まず、巣について書かれているところを教科書の本文中から探した後、前時で学んだダムとの関係について考えた。そうすることで、巣の場所や材料、仕組みに秘密があることが分かり、実際に本で調べるときは、知りたいことに関係のある言葉を探せばよいことに気付くことができた。

４　県の研究との関連

【今年度の研究での成果】

○　「関心」を高める。

児童自身が興味のある動物について調べて紹介するという学習課題を第 1 次で伝えることで、児童の「やってみたい」を引き出していた。また、目的を明確にすることで、児童は見通しをもって学習に臨むことができていた。

【今年度の研究での課題】

○　付けたい力を明確にする。

単元構成を練る際、どのような言語活動を通して、どのような力を身に付けるのかを吟味して教材研究を行うことが大切である。また、児童の「すごい」「びっくりした」等の感覚的な思考を、教材のどのような表現からそう感じたのかを明確にする論理的な思考につなげられるような授業展開について今後深めていきたい。

丸亀市部　研究のあゆみ

１　研究主題

児童が自ら学ぶ国語科学習の展開
－付けたい力を明確にし、その力につながる子どもの「関心」を高めたり
「自信」をもたせたりする授業づくり－

２　研究活動の概要

（１）　１０月２８日（水）香小研国語部会研究発表会（紙上発表）
富熊小学校、栗熊小学校

（２）　１２月２日　（水）飯野小学校　ビデオ視聴による授業研究・討議（会場　城辰小学校）
第５学年　朗読で表現しよう　－大造じいさんとがん－

３　研究内容

（１）香小研国語部会研究発表会（紙上発表）
　新型コロナ感染症の状況に鑑み、研究会当日は両校とも紙上発表としたが、別日に指導者を招聘し、校内での研究授業・討議を行った。以下は、その時の指導の概要である。

富熊小学校

研究主題　　主体的に学び合う児童の育成
～国語科「読むこと」の授業づくりを通して～

①　１年　たのしくよんで作ってみよう「もっともっとサラダでげんき」

・　年間指導計画、物語の系統表などが具現化され、具体的な計画が整備されている。
・　伝え合うためのキーワードがある。「振り返りシート」を活用することが効果的。振り返りは見通しをもつことにつながる。１時間の振り返りだけでなく単元の振り返りも大事にしたい。
・　「言の葉コレクション」ということで、子どもたちが勉強した言葉が集められている。教師が言葉にこだわることで、言葉に注目する子どもの育成につながる。

②　３年　斎藤隆介さんの本の魅力を伝えるポップを作ろう「モチモチの木」

・　ゴールとなる言語活動を設定し、どんな力を付けていくのか、どう活動していくのかを巻末の「言葉の力」を意識しながら学習活動を設定することが大切。
・　登場人物の人物像を読み取る３つの方法について
　○ 性格 や人柄をそのままずばり表す言葉から読み取る方法
　○ 登場人物の行動や会話・気持ちから読み取る方法
　○ 登場人物の「性別」「年齢」や外見等の言葉から読み取る方法
→　これらの方法を学び、活用できるよう指導することで生きて働く力となる。

③　５年　物語のおもしろさを解説しよう「注文の多い料理店」

・　５年生の発達段階として、それまで作品の中だけで読んでいたのが、作品の中だけで読むのではなく、 ５・６年から 作品の外（作者の立場）から段々読めるようになってくる橋渡しが、今日の「注文の多い料理店」。
・　自分の考えと作者の結末の考えを比べることで、資質・能力、見方・考え方が育つ。比べるという思考力が、他の授業でも、日常生活でも生きてくる。
・　思考ツールの活用。本時の板書にベン図を使うことで、自分の結末がどちらに入るのか、宮沢賢治は、ハッピーエンドでもバッドエンドでもなく、真ん中であることが一目瞭然。
・　授業の流れ（ストーリーマップ）を振り返りに使っていたら、授業の学びのストーリーを見直して振り返ることができ、より学びが実感できた。

栗熊小学校

研究主題　　「対象」「自己」「他者」と主体的にかかわりあう児童の育成
　　―　学び合いの質の向上を目指して　―

①　２年　　読んだ感想を伝え合おう「お手紙」

・　単元導入において、言語活動を設定し、そのモデルを示すこと、また、その方法と良さについて全体で共有することが必要である。
・　本単元のように、「自分の体験と結び付ける」ことで、自分の考えがより明確になり、他者に考えを話す際の説得力が増すことが良さとして挙げられる。その良さを共有するからこそ、 第２次終盤や第３次で感想を交流する際、児童が主体的に活動できるだけでなく、他の教科や読書の場面等でも、体験と繋げて考える汎用的な力の育成へとつながる。
・　登場人物の行動を具体的に想像するために、 思考の手がかりとなるものを児童に提示しておくことが必要である。本単元で思考の手がかりとなるのは、特に重点を置いて指導した表情、声や動きなどである。それらの観点を手がかりにしながら、必ず根拠となる叙述を基に想像することが大切である。

②　４年　　登場人物の関わりについて考え、続き話を書こう「ごんぎつね」

・　想像を広げるために、様々な感覚を使って登場人物の様子や気持ちを考えることが大切。「『頭のテレビ』に映してみると、何が見えるかな。」と児童に問いかけると、目・耳・鼻・口・手・心に映るものをたくさん引き出すことができる。自分の経験・知識とつないで、「二、三日雨がふり続いたその間、ごんは、外へも出られなくて、あなの中にしゃがんでいました。」などの叙述を動作化し、想像を広げる活動も取り入れるとさらに効果的。
・　主体的・対話的で深い学びに向けて、今回の授業におけるグループ活動では、「〇〇ごん」について発表した後、「どこから考えましたか。」「どんなことを考えましたか。」「その理由は何ですか。」などと、児童同士で問い返すようにしたらよい。そうすることで、同じ叙述を選んでいても個々の理由の違いに目を向けられるようになり、交流の楽しさを感じたり読みが深まったりする。

③　６年　　物語が強く語りかけてきたことをまとめよう「海のいのち」

・　児童の思考の流れに沿った言語活動の設定や単元計画 、授業１時間の流れが大切。
・　交流の仕方や良さを繰り返し体感する必要性。

・　振り返りの観点の明示は、どれも児童が自ら国語を学ぶために必要なものである。 国語を好きになってもらうためにも、児童目線で授業を見直し、構築していくことが重要。
・　振り返りのタイミングの工夫（単元の効果的な場面、自分の成長や学習方法のよさ、振り返りの意義や価値への気付き）

（２）１２月２日（水）飯野小学校　授業研究・討議（会場　城辰小学校）

第５学年「朗読で表現しよう　ー大造じいさんとがんー」の授業研究は、描写を基に中心人物の人物像を具体的に想像し、朗読で物語を読んで自分が思ったり感じたりしたことを表現することを目標とした。授業討議では、ビデオ視聴を通して次の点について話し合った。

①　学び方のパターン化

子どもたちが見通しをもち、スムーズに学んでいた。教師が扱おうとする叙述が子どもから出ていたのがよかった。主体的に学習する姿が見られた。

②　構造的な板書

シンプルで分かりやすかったが、情景描写をとらえるための挿絵があればよかった。残雪と大造じいさん、両者のやり取りを対比して板書したり、「悔しい」と「感心」を色分けしたりすると、より分かりやすくなる。

③　言葉にこだわる子どもを育てるために

教師が「うなる」という言葉を辞書で調べ、共有したのはよかった。いくつかの選択肢を出し、子どもたちに選ばせるという方法もある。

④　残雪メーターの効果的な活用

・　気持ちの変化をとらえるために、場面ごとの残雪メーターを作り、比べながら考えるとより深い読みにつながる。
・　叙述に即して使えばよかった。山場で使うのが一番効果的。朗読にも生かせる。
・　心のメーターは道徳でよく使うが、国語科でも深い読み取りの一助となる。他教科でも使ってみたい。

⑤　朗読のあとに振り返りを

残雪メーターを朗読に生かすとさらによい。朗読する場面はやはり山場がよい。

４　県の研究との関連

【今年度の研究での成果】

・　「関心」を高めること･･･「振り返りシート」や「振り返りの観点の明示」等、これまでの学びを振り返ることで、「分かったこと」や「できたこと」が明確になり、次時への関心を高めることにつながった。
・　「自信」をもたせること･･･付けたい力を使うための思考ツールや心情メーター等の教具の使用によって、「自分たちで解決できた」という自信を培うことができた。

【今年度の研究での課題】

・　「自信」をもたせるために･･･成功経験を積むことが大切である。今年度の授業研究で行ったように、並行読書を取り入れたり、既習事項を繰り返し使う場を設定したりする等、単元構成を工夫することで、付けたい力が児童に身に付くようにしたい。
・　主体的に学習に取り組む態度の評価･･･振り返りの際に、どのような観点で見取っていけばよいのか明らかにしていく必要がある。

三豊・観音寺市部　研究のあゆみ

１　研究主題　　児童が自ら学ぶ国語科学習の展開　―付けたい力を明確にし、その力につながる児童の「関心」を高めたり「自信」をもたせたりする授業づくり―

２　研究活動の概要

(1)　４月　　○　研究主題・組織等決定

(2)　９月１１日（金）　三観小研国語部会理事研修会（三豊市立詫間小学校）

○　部会長講話

○　研修、意見交換

３　研究内容（理事研修会の概要）

(1)　真鍋佳樹部会長の講話

「コロナ禍における対話的活動とは（国語科）―３密回避と対話的活動の充実を目指して―」

「主体的・対話的で深い学び」とは何かを明確にするために、次のような方法で考えてみる。

【理解しにくい言葉をなんとかとらえるための方法】①　類義語と比較する。(用例を比較する。)②　対義語と比較する。(用例を比較する。)③　過去の研究等でその言葉が使われていないかを調べる。④他のもの（事象）に例える。(当てはめてみる。)

主体的とは（深い学びの条件　その１）　　＊丸数字は上記の方法を示す。

①　主体的と自主的を比較

主体的は、やるべき事が決まっていない。(自己判断・選択性がある）自主的は、やるべき事が決まっている。それを自らの意思で行う。

②　主体と客体を比較

主体（子ども）が、客体（対象・他者・自己）に向かって働きかける意味がある。

③　平成元年（1989 年）学習指導要領（新しい学力観）

個性尊重、生涯学習、情報化への対応、主体的学習、問題解決学習

対話的とは（深い学びの条件　その２）

①　対話と会話を比較

対話は、対して話す、目的的、シリアス、決定、約束、深まり。会話は、会して話す、自由性、気楽、非公式。

③　佐藤学（対話的学びの三位一体論　1990 年頃から）

対象との対話（物語、説明文･･･）自己との対話（メタ認知も含む　内言）他者との対話（教師、友達、取材、発表･･･）対話的とは、単なる他者との目的的な話し合いだけとは、とらえない方がよい。

深い学びとは

①　深い学びと浅い学びを比較

深い学びとは、浅い学びではない学びである。浅い学びとは、単なる知識・技術の習得（覚え込み)、時間や労力をかけない（脳が働かない)、他の場面や領域に活用できない、単純であり複雑でない、練り上げない・吟味しない、視点や視野が狭い、子どもが新たな知をつくり出さない。

③　教育課程企画特別部会（論点整理　H27.8.26）

深い学びとは、習得・活用・探求という学習プロセス（問題発見・問題解決）の中で培われ、子どもたちに思考、判断、表現させる場である。

５つの言語意識（目的・相手意識、場面・状況意識、条件意識、方法意識、評価意識）を吟味する。国語科で言えば、言語形式（題名、比喩、情景、会話、呼称、文末、接続語･･･）は、見方（目に見えるもの）であり、思考スキル（比較、関連付け、関係付け、具体化、抽象化･･･）は、考え方（目に見えないもの）である。鳴門教育大学、泰山裕准教授は、「思考スキル」を 20 項目に整理し、それを顕在化した「思考ツール」を提示している。

④　板書に例えると、右へ行くほど見方が広がり、右下へ行くほど認識・思考が深まる。

(2)　研修、意見交換

「コロナ禍における対話的活動とは？―３密の回避と対話活動の充実―」をテーマに、意見交換をした。まず、各自が３色の付箋紙（青色･･･コロナ禍でもできること、黄色･･･マスクをつける等条件付きでできること、赤色･･･できないこと）に自分の意見を書いた。その後、コロナ禍における対話活動を実施する際に、「できること」「条件付きでできること」「できないこと」の３つを「個人」「ペア」「グループ」「その他の場面」に分けてＫＪ法で分類し、今後の対話活動を充実させる方法を討議した。

【コロナ禍における対話活動実施の課題】

●　環境面の整備

＜改善策＞

○　マスク、机の距離・配置等（ソーシャルディスタンス）、パーテーション等の設置

○　ＩＣＴ機器の活用

●　活動時間の短縮・焦点化

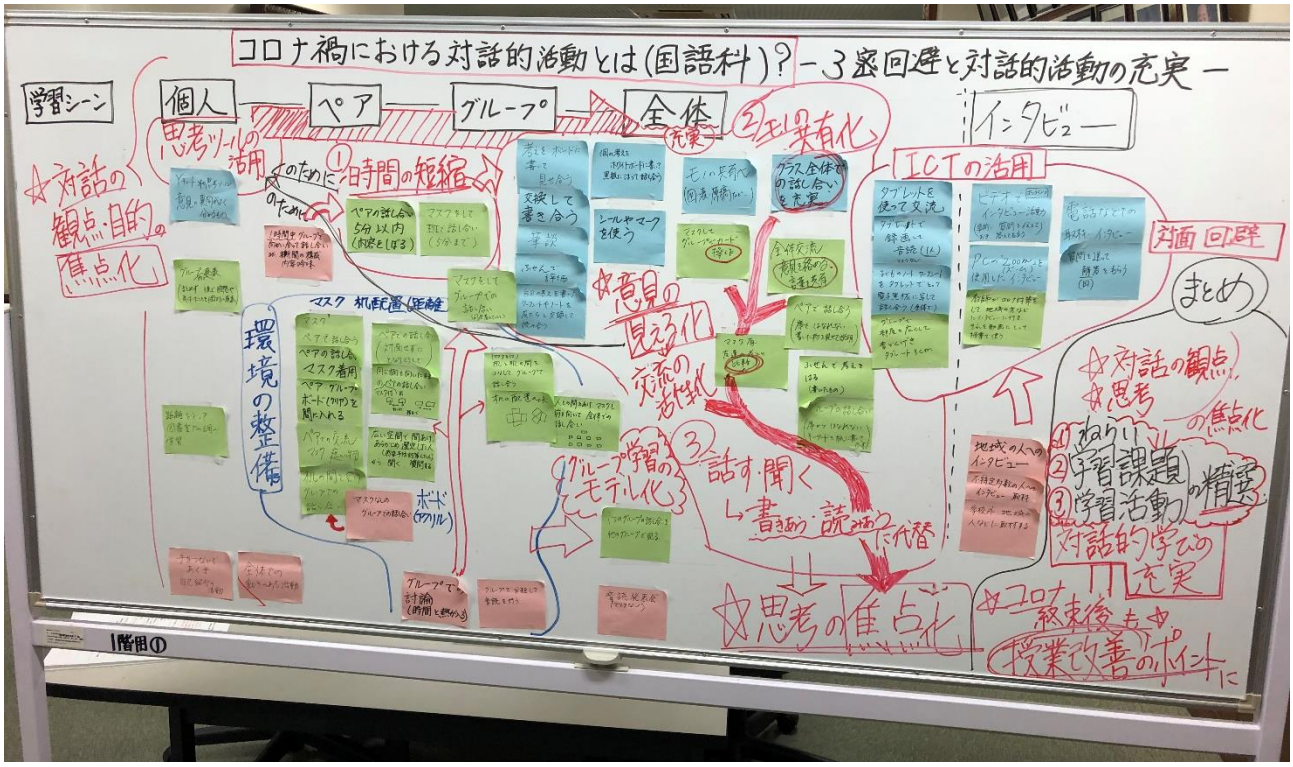
＜改善策＞

①　時間の短縮　←　対話の観点の焦点化
＜話し合う時間の制限＞ ＜意見の異同の明確化＞ →思考ツールの活用 表、ベン図、Ｙチャート、マトリックス…など 交流する時にどこを見れば良いか、焦点化できる →活動の工夫 赤白帽や名前磁石等を活用、交流する相手を焦点化できる
②　モノの共有化　←　意見の「見える」化
ホワイトボードの活用（書く→見せ合う） シール・マークの活用 付箋の活用やカードの操作 グループ学習のモデル化（望ましい交流を実際に演じてみる） ＩＣＴの活用（タブレットで投影など）
③　話す・聞く　←　書き合う・読み合うに代替
話す聞く単元の活動→原稿を書く→①②と絡め、付箋やシールなどでの交流

※ＫＪ法を通して見えた、コロナ禍における対話的活動充実のポイント

○　対話の観点・思考の焦点化
○　ねらい・学習課題の精選
○　学習活動の精選

⇨ コロナ禍収束後にも必要な授業改善のポイントに



4　県の研究との関連

【今年度の研究での成果】

今年度は、新型コロナウイルス感染防止対策実施により、各種研修会が中止となった。その中で、感染予防対策に努めながら理事による研修会を行い、国語科における「主体的・対話的で深い学び」とは何かを明確にした。また、「コロナ禍における対話的活動とは？―３密の回避と対話活動の充実―」をテーマに意見交換をし、知恵を出し合った。コロナ禍においても様々な工夫をすることにより、対話的活動をすることができることが分かった。さらに、「対話の観点・思考の焦点化」、「ねらい・学習課題の精選」、「学習活動の精選」は、コロナ禍収束後にも必要な授業改善のポイントになる。教師が様々な工夫をしながら、児童に対話的活動を充実させることにより、児童の「関心」を高めたり「自信」をもたせたりすることができるのではないかと考える。

【今年度の研究での課題】

今年度は、国語科における「主体的・対話的で深い学び」、「コロナ禍における対話的活動とは？―３密の回避と対話活動の充実―」について提案し、各校で実践するにとどまった。今後は、児童の「関心」を高めたり「自信」をもたせたりする授業づくりについて、具体的に実践を行い、研修を深めたいと思う。